



[千倉・丸山地域ほか]

**実施者**

- ◀実施者▶ 産学協働地域活力創造事業 地域コーディネーター青木 秀幸（千葉工業大学非常勤講師，合同会社いいもんだ）南房総学サポート）千葉工業大学 社会システム学部 プロジェクトマネジメント学科 加藤研究室学生6名
- ◀協働パートナー▶
  - 【行政】南房総市 市民生活部 市民課 市民協働G／商工観光部 商工課，観光プロモーション課／教育委員会 子ども教育課／総務部 企画財政課
  - 【学校】千倉中学校 3年生 75人，担任および関係教諭
  - 【企業等】房州うちわ振興協議会，みねおかいきいき館，南房総市観光協会ほか
  - 【市民団体等】千倉地域づくり協議会きずな，高家学ぼう会，竹文化振興協会千葉支部

**1. 背景・目的**

世界で保護・保全すべき地域「生物多様性ホットスポット」（世界36ヵ所）の一つに指定されている日本。その重要なポイントの一つが日本の里山である。今その里山が放置された竹の引き起こす「竹害」によって危機に瀕している。市内では日本3大うちわの一つ「房州うちわ」づくりにおいても、昨年までの産業関連業者の実態調査や関係者へ聞き取りから、女竹林の荒廃で適した太さや節間のあるものが減少し、幼竹をイノシシに食べられてしまう等の獣害被害も相まって毎年竹の採集が困難になっている(原料調達問題)が明らかになってきた。このような状況下で今後、竹害から人々の暮らしを守り、南房総市での暮らしや伝統的産業の拠り所となる里山との共生を図るためには「竹林を適正管理する整備手法」と「新奇で継続性のある利活用法(事業)」の開発が必要不可欠である。

そこで本プロジェクトでは、以下の目的のもと市内の竹林整備と竹の利活用の開発を進めることとする。

- ①竹林の整備手法の開発では、房州うちわの原料調達問題を鑑み、伝統的工芸品産業の継承の視点から原料となる女竹の効率的採集にむけた竹林の適正管理手法を開発すること
- ②間伐した竹の利活用法の開発では、地元市民団体主導型の事業の継続と新事業展開に対して、技術的な支援を行う

**2. 活動内容**

**(1) 房州地方の女竹林に関する竹林整備手法の開発**

～房州うちわ伝統的産業の継承の視点から～ ※図1～4

本PJでは、昨年度より房州うちわの効率的な原料採取にむけた房州産女竹に関する竹林管理の要点を解明するため研究を開始し、昨年は関係者へのヒヤリング、既往文献調査を経て研究計画を策定した。続いて本年度は以下の内容に取り組んだ。

＝活動詳細(2023)＝

- ・「うちわの原料に適した女竹」への認識調査(対象：うちわ職人)と要件の整理(令和5房州うちわ従事者入門講座全5回の見学等)
- ・実験林の候補地の現場視察と区画設定(R5年は2箇所を設定)
- ・実験林の調査項目の設定と生態観察の一部開始 ほか

**(2) 間伐した竹材活用のための新事業展開・継続にむけた技術的支援**  
**①災害復興から始まった「南房総竹あかり」イベントの運営管理の効率化支援【災害復興・観光振興面】 ※図5～6**

今年で5年目を迎え、神社を訪れる観光客や周辺旅館、神社等関係者からも好評を博し、千倉の冬の風物詩としても定着しつつある南房総市竹あかり。本PJでは、これまでイベントの持続可能性を高めるべく、竹灯籠の設置における運営団体の「つくる負担」と「組み立てる負担」の半減を試みてきた。その一貫として昨年は「新固定システム」(2m程度の竹灯籠3本を簡単に繋ぎとめ地面に垂直に設置する筋交い接合)を開発し、その導入によって設置の際の必要人数の低減、組み立て所要時間の短縮(組み立てる負担)への可能性が示唆された。本年度はこのシステムの実用化と現場普及を目指して以下を試みた。

＝検証＝

- ・新固定システム型竹灯籠ユニットの一定量の制作とその工程での課題の整理(コスト検証も含む)
- ・運営団体メンバーによる新固定システム型竹灯籠の組み立て検証
- ・継続利用による耐久テスト、金具の親和性の確認 ほか

**②千倉中南房総学「竹あかり大作戦」の学習支援【教育面】**

本PJでは2022年度から新たにそれまでの知見を学校教育の現場へ水平展開する試みをスタートさせた。本年度は昨年に引き続き「竹あかりづくり」のプログラムを、千倉中南房総学の中で千倉地域づくり協議会高家学ぼう会とともに企画・運営した(12/8,千倉



1,2「房州うちわ従事者入門講座」の第1回講座女竹の選定・伐採・皮むきの様子。3,4第2回講座の割竹(48～64等分)の作業風景。女竹の質によって作業性が大きく左右される。5.「南房総市竹あかり」イベント設置での「組み立てる負担」半減を目指した竹灯籠同志をつなぐ新固定システム(構成する9本の竹部材) 6.実際の設置現場で組み立てやすさを検証。



7.千倉中での南房総学「竹あかり大作戦」の様子 8,9千倉中3年生75名の力作が高家神社の参道に飾られ奉納。女子生徒によるハートの切り口の竹灯籠。中には願い事が書き込まれた。

**域学協働の工夫!**

- ★市民団体・事業主を主役とし自立と新事業展開を助ける大学関係人口による技術支援
- ★地域の“本当に困った”に対する課題認識と課題解決にむけたビジョンの共有
- ★協働事業における途中の成果検証と改善を挟んだ伴走型の事業支援

中,75名,2コマ90分,1～2個/人の作成,計130個程度のミニ竹灯籠の制作)。それに際しては、昨年の課題をふまえて、効率的で安全な当日運営,地域への誇りと愛着(シビックプライド)の増進等を目指して以下のような技術的試験を行った(図7～9)。

＝本PJによる主な技術支援＝

- ・安全管理,体験促進のため工大生の参加【安全面】
- ・穴あけ工具等の効率的配置【効率面】
- ・ハート型の切り口の竹材の準備【演出面】

**3. 成果と課題**

**(1) 地域貢献面**

- ・房州うちわ伝統工芸品産業支援では、房州うちわ用女竹の効率的採集にむけた研究において、うちわ用女竹の要件整理で、うちわづくりにおける竹素材へのこだわりが「仕上がりに」や「生産性向上」へのこだわり起因することが解った。そのうえで共通・個別の要件整理ができた。また実験林の区画は、かつての名産地2地区で設定でき生態観察をスタートさせることができている。
- ・「南房総市竹あかり」の設置の負担半減を目指して開発された新

\*表彰・マスコミ掲載など

- ・「高家神社に竹灯籠 千倉中75人150基つくる」房日新聞,2023.12.23
- ・「高家神社に竹灯籠とます」房日新聞,2024.1.9
- ・「年の瀬の竹あかり 幻想的 佐倉・志津駅南口 南房総・高家神社」東京新聞,2023.12.29

固定システムの現場検証の結果、必要人員の低減と時間短縮等には組み立て手順,方法のさらなる改善が必要であることが明らかとなった。また竹と金物との接合部の耐久性にも課題が残った。

**(2) 教育・研究面**

- ・統合前最後の千倉中3年生の思い出づくりへの貢献ができ、参加者や関係者からも喜んでもらえた。後日多くの関係者の参拝があった。
- ・学生サポーターの協力によるワークショップの安全管理や体験促進,穴あけ工具の増設と適正配備によって、一人当たりの体験時間を増やすことが叶い、目標としていた竹灯籠数に達することができた。

**4. 今後の展開**

本年度に引き続き房州うちわ等伝統工芸品産業支援では、原料調達問題の一助としてもらうための房州地方の女竹林に関する生態観察調査を本格化させる。また間伐した竹資源の活用策について環境教育等への有効性を検証しながら、地元団体の新事業への実装に向けた技術的な支援等も引き続き取り組む。